



海援隊旗(二曳きの旗)

<http://www.ryoma-kinenkan.jp>

勇 往 YUUOU MAISHIN 邁 進

令和4年度企画展

「龍馬脱藩160年 維新へつながる土佐の道」展

4月16日(土)いよいよ開展!

本年令和4(2022)年は、文久2(1862)年から数えて160年目にあたります。文久2年といえば、尊王攘夷の嵐が近づき、幕末政治のひとつのピークが始まる年です。そのような時流に乗るかのようには、龍馬は生まれ故郷の土佐藩を脱し、全国規模の活動に身を投じました。

龍馬脱藩を俯瞰する

ただし、この時龍馬は、人知れず、孤独に、突然、脱藩したわけではありません。龍馬とその周辺には、はつきりとその前触れがありました。そのうち、藩内には、前年文久元(1861)年8月に結成された土佐勤王党、そしてその盟主である武市半平太の存在がありました。龍馬は、勤王党に加わると、早速、藩外に活動の範囲を広げます。もちろん、勤王党の意向を受けたものでした。一方、藩外の事情として、当時の尊王攘夷運動の高揚、特にそれを主導した長州藩の動向が見逃ごせません。土佐の脱藩第一号とされる吉村虎太郎をはじめ、沢村惣之丞、そして龍馬。文久2年に脱藩を果たした土佐藩出身の志士は、軒並み長州藩勢力の影響下にあった

のです。そのような志士の一人として、龍馬を取り上げます。

龍馬の脱藩ルート

龍馬の脱藩についてよく論じられるのが、どのような道をとって脱藩を果たしたのか、という脱藩ルートでしょう。これについては、いわゆる「龍馬脱藩の道」が半ば公のものとなって定説化している一方、それに対する反論も存在します。結論としては、ある一点を除き「分からない」と言うほかありません。脱藩ルートを考えるにあたり、何が分かるのか、何が分からないのか、それが何故分かるのか、何故分からないのか。このあたりの事情を、関係資料の展示を通じて可能な限り詳しく紹介し、龍馬脱藩の旅の実態に迫ります。

土佐藩の道路事情

龍馬脱藩の道については、極力目立たないようマイナーな道を通ったと考えることもできますし、逆に堂々とメインストリートを通った可能性もあります。考えてみれば、当時の土佐には、主要道路があったことになりま

す。本展では、やや視点を変えて、この点にも着目します。江戸時代の土佐藩の幹線道路の例として、参勤交代の際に大名行列が通った道、そして庶民の四国遍路の道を取り上げます。ゆかりの資料を通じて、これらの道と人々の往来について紹介します。

龍馬の脱藩を、龍馬個人の問題から少し引き離すと、それが単純な「しがらみを脱した新たなスタート」ではなかったことが分かります。本展をご覧いただければ、今までは少し違う脱藩論に触れられるかもしれません。ご期待ください。

高山嘉明



樋口真吉の日記「遺傳録」(四万十市教育委員会所蔵)。龍馬の藩外活動のスタートを「坂竜飛騰」と表現した。

開館30周年記念

特別展「龍馬と北の大地」

第一、二部とも終了

北海道で、龍馬が生きる―チヨッコウさん再びを振り返る

コロナ禍と、熱心な視線と、人生の風景

半年に及ぶ特別展「龍馬と北の大地」は、第二部終了により4月3日に満了。全期を通して4万人近い方に、「龍馬と北の大地」をご覧いただきました。

第一部ではコロナ状況も落ち着き始め、入館者も増えていましたが、第二部では年明けからの感染者状況の悪化に伴い、見る間に入館者は減少しました。そんな状況下でも、わざわざ坂本直行とその絵に向き合うべくご来館くださった方々に接し、熱いものが込み上げました。

ご覧いただいた多くの方たち、ご協力いただいた関係機関、関係者の皆様に心より感謝申し上げます。

龍馬の甥を祖父に持ち、北海道釧路に生まれた坂本直行は、婿養子であった父、弥太郎の期待に反発。自分自身の生き方を選択することで、龍馬ゆかりの坂本家という重荷から解放されました。その人生を賭けた場所が、道内十勝地方、広尾町。しかも、町中心部から外れた太平洋側の未開地下野塚で、西側遠方に2,000メートル級の日高山脈を望む原野でした。

直行は自己実現のために開拓農民として30年の歳月を広尾町で過ごします。厳しい自然の中で家族だけで開墾の鋤を握り、

重労働の合間にも絵筆を持ち続けました。一番には家族、また母校北海道大学山岳部の仲間たちの訪問も開拓生活の厳しさを支えます。

万一生きながらえた龍馬が北の大地に渡ったとして、果たしてこの原野に鋤を振るうことができたのか。それを想像することすら困難な大自然です。

会場には美術展のように多くの絵を並べました。会期中展示した絵画や資料は延べ120余点、何のてらいもなく描かれた油彩画水彩画の数々です。

通期で中心に据えたのは、80号のキャンバスに描かれた「十勝大平原と日高連峰」(油彩、1960年)帯広百年記念館所蔵。手前に白樺や柏、立ち枯れの木々が見る者に迫り、遠方には日高の山なみが澄んだ秋空に続いている。そして、圧倒的な広がりを持つのは、直行が大平原と謳った未開の原野風景です。

1960年というのは、直行が原野での開墾生活に終止符を打ち、町なかに居を移して画家として出発した年です。原野では多忙な農作業と貧困の中で自由に使えなかった画布と絵具をふんだんに使った描かれたこの絵は、毎日毎日、日高山脈を見続けた男の意気込みと躍動が伝わってきます。まさに再出発した直行の心象で

はないかと思えます。直行は原野と日高山脈を見続け、描き続けた。

道内でも特有の風土を持つ十勝地方。中でも広尾町は、四国の中にある高知のように、独特な気候風土を持っています。西に日高山脈、北に大雪山系、東には白糠丘陵と、三方を山なみに囲まれたうえ、南は太平洋(寒流)に臨む。その中で鋤を振るい続けた直行のまなざしは、日高の風景と、厳しい冬を耐えて一斉に咲く草花たちに注がれました。

花々は北海道を代表する菓子メーカー六花亭(本社・帯広市)の包装紙で有名です。はまなし、かたくり、おおばなのえんれいそう、かわらなでしこ、えぞのりゅうきんか、えぞりんどう。六花亭によつて、十勝六花亭として選ばれた北海道十勝を代表する花々を中心に、2月からの後期では会場にも一斉に花を増やしました。前期の晩秋の風景は一部、春から初夏の風景へと替わりました。

15年前、現在の本館すべてを「反骨の農民画家・坂本直行」として紹介した規模からいうと、今回は企画展示室のみの展示となりましたが、展示のため観覧のための展示室で見る直行の絵は、また違ったものに映りました。直行絵画をご堪能いただけたのではないかと自負します。

会期中、絵を眺めるうちに私自身に新しい感覚が生まれました。直行が描き続けたものは、自らの人生そのものだったのではない。直行が後にあこがれのヒマラヤに出かけ、スケッチブックに収まらないと言った高峰ならずとも、若いエネルギーと



反骨を燃やして描いた日高の山なみは、登っても登っても身体に収まり切れない山並みへの挑戦。愛しても愛しても愛し足りない野の花々の気高さや可憐さ。そんな心象を持った直行であればこそ、没後40年の今なお、直行の絵は私たちに語りかけて来るのだということ。です。

第二部は、龍馬と直行に共通する「開拓」がテーマでした。若く人生に挑戦した時期の直行を中心に紹介したことで、絵の向こうにあるもの。開拓の厳しさと情熱、人生の妙味が見えた気がします。

前田 由紀枝

ウォーキングイベント・史跡巡り 「浦戸のんびり散策」開催しました

ウォーキングイベント・史跡巡りも今回で3回目となりました。1回目（令和元年度）は、高知市長浜の雪隠寺や若宮八幡宮から当館までの間に点在する長宗我部氏に関する史跡を中心に巡り、2回目（令和2年度）は、JR円行寺駅前に新しくできた「志の龍馬像」を起点に、町中の幕末維新期の人物の銅像めぐりを中心とした内容でした。

新型コロナウイルス感染症がなかなか収まらない3回目の今回は、近くの地域をめぐる「マイクロ・ツーリズム」ということで、当館が建つ高知市浦戸を散策することとし、過去2回よりも距離を短くし、午前中に終わるコースとしました。解説は、県立歴史民俗資料館の石畑匡基学芸員です。

当館に集合した後、まずは当館南側の遊歩道を歩き、3条の「堀切」を見学。当館がたつ一帯は長宗我部氏の居城「浦戸城」があったとされる場所です。この「堀切」も敵の侵入を防ぐために、



堀切（左のほうが堀切）

尾根を横に切断したものです。当館のすぐ近くに、こうした中世の城跡があることはあまり知られていないようです。堀切を過ぎ、階段を下りていくと浦戸大橋のたもと、大橋の下をくぐって進みます（こんな道があるなんて！と驚かれる方も！）。

民家の間を歩きながら、長宗我部氏の時代に創建された受法寺を訪ねました。こちらでは、本堂で住職から受法寺のお話をお聞きし、また戦国時代の浦戸のまちをCGで再現した動画などを見せていただきました。



受法寺

続いて、長宗我部元親が勧請した稲荷神社ですが、見どころは、安政の大地震での津波についての「津波記念碑」です。地震で倒



津波記念碑

れた鳥居の柱を再利用しています。

稲荷神社を後にして、片岡半斎の墓を訪ねます。これは、江戸時代前期の思想家、山崎闇斎撰の墓碑であり、闇斎に



稲荷神社（右奥に「津波記念碑」が見えます）

よる墓碑は県内ではこの片岡半斎と本山町の野中兼山実母の墓の2つだけというところで、非常に貴重な史跡、と石畑学芸員が強調されていました。（実は、下見の際になかなか見つけることができず、何度も周辺を行ったり来たりして、やっと見つけることができました。）



片岡半斎墓

ウォーキングの終盤は、桂浜周辺の散策です。今回は砲台跡と龍馬像と「豪気節」碑の3つを見学しましたが、桂浜には他にも坂本龍馬の顕彰碑や文学碑なども多数点在していますので、次の機会には、別の碑も訪ねたいと思います。当館に臨接

する国民宿舎脇に保存されている浦戸城の石垣を最後に見学し、今回のウォーキングイベントは終了いたしました。



「豪気節」碑



桂浜の「坂本龍馬像」（龍馬の背中）

浦戸は、ガイドブックなどで紹介されることはあまりない地域のひとつだと思えますが、丹念にみていくと、史跡や見どころはいくつもあることがわかりました。歴史のない地域はない、ということでしょう。今後のウォーキングイベントでも、ガイドブックにはあまり載らない……ような高知の地域を歩いて訪ねます！

★令和4年度は12月4日（日）高知市三里地区をウォーキングする予定です。10月末頃から申込受付予定です。

河村章代



令和3年度

連続講演会が終了しました【報告】

令和3年度の連続講演会「龍馬を考える5つの視座」が終了しました。一昨年の冬からの新型コロナウイルス感染症の流行をうけ、今年度も第2回目は中止となったことは、仕方がないとはいえ、残念でなりません。

今年度は当館開館30周年にあたることから、この30年間の、龍馬や幕末に関する新たな研究成果についてお話いただくことをテーマとしました。第1回目は、文献資料が極めて少ない「薩長同盟」について、会談後の帰路での木戸孝允らの行動に着目したご研究について、青山忠正氏よりお話いただきました。第3回目は、黒須里美氏より、江戸時代の家族や結婚についてお話をいただき、龍馬の結婚や家族制度について、新たな視点での研究の可能性をお示しくださいました。第4回目では、桐野作人氏が、今なお話題になる「龍馬暗殺」について、当時の政治体制の中から考え直すという視点からの研究成果をお話くださいました。そして、第5回目は知野文哉氏による、「坂本龍馬」イメージ構築の過程についての詳細な研究成果の発表で、今年度の連続講演会を締めくくりました。

各講演会の詳しい内容については、5月末頃発行予定の「連続講演会講演録」でお読みください。

コロナ禍に翻弄される中、新たな取り組みも始めました。館内での同時配信とYouTubeによる録画配信です。会場となるホールの定員を半分にしたため、ご参加いただけないお客様が多くなり、その対応として、ホール以外の場所でも同時配信をご覧いただくという方法を始めました。画像や音声の調整が開演直前にやっとなり、という冷や汗を何度もかきました。お客様に少しでも臨場感を味わっていただければ幸いです。そして、講演会終了後は録画をYouTubeで配信する試みも始めました。期間限定となりますが、遠方やご都合で来館いただけなかったお客様から好評をいただきました。これらの取り組みは次年度も継続する予定です。

次年度は、江戸時代、我が国の中枢を担う存在であった「武士」をテーマに、高知県立坂本龍馬記念館でしか聞けない講演会をお届けできるよう、開催の準備をすすめております。どうぞご期待ください。

河村章代



講演会の様子 (令和4年2月26日)



新館シアターコーナーでの同時配信の様子 (令和4年2月26日)

令和3年度連続講演会 演題と講師(敬称略)

1	6月12日(土)	木戸と大久保の呉越同舟 - 薩長同盟からの帰り道 -	青山忠正 (佛光大学名誉教授)
2	8月28日(土) - 中止 -	薩摩藩と坂本龍馬	町田明広 (神田外国語大学外国語学部教授)
3	10月23日(土)	龍馬の時代の人口と家族	黒須里美 (麗澤大学国際学部教授)
4	12月11日(土)	龍馬暗殺はなぜ起こったか - 近江屋事件の政治力学 -	桐野作人 (歴史作家・武蔵野大学 政治経済研究所客員研究員)
5	令和4年2月26日(土)	坂本龍馬伝の成立 - 坂崎紫瀾と「船中八策」を中心に -	知野文哉 (歴史研究家)

令和4年度から連続講演会申込方法が変わります

- ・全回分を一括して申し込むことはできません。
- ・開催月の前月1日午前9時から各回分のお申し込みを、電話、FAX、メール、ホームページ申込フォームで受け付けます。(例: 6月開催分の申込→5月1日9時から受付開始)
- ・開催月の前月1日午前9時以前にお申し込みいただいたものは、無効とさせていただきますので、予めご了承ください。

龍馬の手紙

14

薩長同盟裏書

令和3年秋、高知県立坂本龍馬記念館では「開館30周年記念 坂本龍馬真筆展 示」において、宮内庁書陵部所蔵の、いわゆる「薩長同盟裏書（「裏書」の書陵部での書名は『木戸家文書』、以下、『裏書』）が展示された。私も資料保存担当として展示作業に立ち会ったが、会期中に表裏を反転させて展示を行うといった工夫が凝らされていたことは興味深くもあった。この裏書は、木戸孝允が薩長同盟6項目の内容を確認すべく坂本龍馬に宛てた書状の裏に、龍馬が朱書きで相違ない旨を書いたものとして広く知られている。書陵部所蔵資料の中でも展示会への出陳だけでなく、映像や書籍等で紹介されることも多い。この機会に、近年にどれだけ取り上げられてきたか、調べてみることにした。

展覧会への出陳は、平成22、27、28、30年度にあった。平成22年度は宮内庁三の丸尚蔵館で行われた「皇室の文庫 書陵部の名品」に出品されたが、折しも大河ドラマ「龍馬伝」の放映年であり、多くの方にお運びいただいた。また、平成30年は明治150年にあたり、大河ドラマも「西郷どん」で、多くの機関から出陳依頼を受けたことも強く印象に残っている（貸出は年に1回、その後1年間は資料保護のため貸出は行わない）。

映像への使用回数は、平成28、29年度は6回、30年度は4回、令和元年度は1回、2年度は4回、3年度は2回、書籍への写真掲載は、平成28年度は15回、29年度は27回、30年度は14回、令和元年度は8回、2年度は9回、3年度は2回と、書陵部所蔵資料の中では群を抜いて多い。変わらぬ関心の高さが改めて裏付けられたが、また機会が得られれば裏書そのものについても少し触れてみたいと思う。

（宮内庁書陵部図書課保存調査室主任研究官）

田代 圭一

私の
おすすめ

No.14

大海原を一望！

屋上からの景色

私のおすすめは、本館の屋上から悠々と広がる素晴らしい景色です。屋上へは3通りの行き方がありますが、中にはいくつもの螺旋階段を上がって行くちょっとハードな行き方も…

でも到着したその先には、これまでの疲れを一瞬で忘れさせてしまう様な青く深い海と長い水平線が待っています。どこまでも続く海岸線を見渡すだけでも高知が誇る雄大な桂浜を彷彿とさせてくれ、時折数羽のトンビが気持ちよさそうに風に乘って飛んでいる姿を目にします。勿論お天気の良い日には、絶好の撮影場所になる事間違いありません！

しかし夏の台風時には一転、自然の驚異が大きな牙をむきます。テレビ放送でもよく中継をされる吹き荒れる波風は、日頃の穏やかな景色を消し去ります。これも自然の摂理として受け止めていかなければなりません。そんな時は早くこの時間が過ぎ去ってくれる事を祈るばかりです。

余談ですが私の通勤途中にも、ある

一定の場所まで来るとだんだん目の前に海が開けてきます。さらさらとした水面に映る光線には、遠くから見るとぼつかりと浮かぶまるで模型のような貿易船や、大漁を願う漁船が行きかう様子は日々なんとも趣があります。そんな朝の一コマもあれば夕日の沈む少し寂しい光景も、全てご来館頂いた皆様の素敵な思い出になれば嬉しいかぎりです。

昨年30周年を迎えた記念館ですが、この場所は昔も今も変わらず、これからもずっと同じ佇まいで私達の目を楽しませてくれる事でしょう。

西川 知佐





写真をご覧いただくと分かる通り、当館は海辺の博物館であり、必ず起こるといわれている南海大地震による津波を想定しなければならない場所に建っている。そのため当館は、一般の方から「龍馬記念館の建っている場所は標高何メートルですか？津波は大丈夫ですか？」という質問を受けることがある。この質問に答える時、役に立つのが国土地理院の地図である。

インターネットで「国土地理院地図」と検索すればすぐに「地理院地図（電子国土Web）」というページが出てくる。標準地図であれば地図の中心の標高が左下に表示されており、当館の本館南端で46.4m、新館北端で52.3mと表示される。

2012年に内閣府が公表した津波の高さの予想では、高知県黒潮町が全国で最も高く約34mとなっている。当館を含む浦戸湾は約14mという予想なので、津波が当館へ達することはまずないと考えられる。

桂浜の標高を見てみると、桂浜水族館は69m、龍馬像は20.0m、竜王岬は6.3mとなっているので、龍馬像周辺なら辛うじて大丈夫かもしれない。しかし、予想を超える津波も想定するべきなので、

できれば桂浜水族館の裏にある椿の小径つばきこみちを通って、「龍馬記念館前バス停」付近まで避難することが望ましいだろう。このバス停なら標高は40.4mある。そして、椿の小径は、岩盤が強固で、崩れる可能性が低いので、桂浜からの良い避難路になるようだ。

高知市中心部は、関ヶ原の戦い以後、土佐へ入国した山内氏が造った町で、それ以前は湿地帯もしくは湾の水の中だった。そのため高知市には、葛島かづらじまや比島ひじま、竹島、洞ヶ島ほらがしまなど地名に島が付く地域が多く、それらは湾内に浮かぶ島だったことを物語っている。葛島は現在でも小山が残っており、山頂には大山祇神社おほやまづみが建っている。その標高は約17mあるが、周辺は0.9mしかない。

高知県立美術館周辺も低く、美術館の建っている場所は1.6m、北側の高知市東消防署周辺は、「砂地」という地名が示す通り、さらに低く-0.6mである。

この地図は他にも興味深い機能が付いている。「土地の成り立ち・土地利用」をクリックすると、「活断層」や「明治期の低湿地」などの項目が出てくる。これらも非常に役に立つ。高知県には今のところ主要な活断層が無いとされているので、地図には出てこない。一方、明治期には高知市中心部のほとんどが低湿地帯だったと示されている。

その他、「写真」という項目も非常に興味深い。この中に「年代別の写真」という項目があり、さらにその中の「単写真」をクリックすると、写真地図の中に赤い点がいくつも出てくる。例えば、当館周辺を見てみると、1947年、1975年、2010年、2017年などに撮られた空中写真を開いた上で、「高解像度表示」に切り替えると、かなり拡大することが出来る。2010年4月17日に撮られた写真を見ると、NHK大河ドラマ「龍馬伝」が放送されている年で、土曜日ということもあり、当館や桂浜の駐車場はほぼ満車だということが分かる。当館は臨時駐車場までほぼ満車で、バス駐車場も満車である。

また、1975年の写真を見ると、当館の場所にはプール付きの保養施設が見える。2017年の写真では新館建設中の様子も写っている。これらの空中写真は購入できるので、記録として活用することも出来る。戦後すぐの写真に写っている戦争関連の施設など、今は目にする事ができないものが写っていることもある。幼い頃の懐かしい場所を見るのも面白い。

以上、この地図については、東京文化財研究所の先生に活用を勧められたもので、自分の勤めている場所の情報を知るには大変有益であるため、皆さんも一度は確認していただきたい。

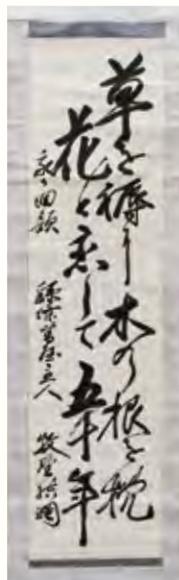
牧野富太郎博士がモデルの ドラマ化に寄せて

振り返りますと2009年の「つばさ」の頃から思いますが、主にヒロインの人生を描くNHK朝の「連続テレビ小説」を何とか続けて視聴しています。前職時代に東京渋谷のNHK放送センターを訪ねた際、撮影スタジオで「つばさ」のシーンに使われたヒロインの「自宅の屋根」のロケセットを見させていただきました。屋根セットがポツンと床に置かれたような現場であったかと記憶していますが、よくこのような環境で役者さんは視聴者を魅了する芝居ができるものなのだなぁと感心したことでした。他方、その時に併せて見た「龍馬伝」の撮影スタジオには、長年使い込んできたような、いわゆるエイジング加工を施した武家屋敷と、スタジオ内を照明によって「早朝」や「真昼」などに変える演出をご紹

介もいただき、一連の技術力の高さにたいへん驚かされたことも憶えております。また、その期の「連続テレビ小説」は「ゲゲゲの女房」。その撮影現場にも案内していただき、ご夫婦役のお二人の役者さんの姿を垣間見たことでした。このほど、高知県佐川町出身の植物分類学者・牧野富太郎博士がモデルとなる連続テレビ小説「らんまん」の放送が決まりました。今年は丁度、牧野富太郎生誕160年にもあたり、「今こそ牧野富太郎博士の生涯を！」とドラマ化をめざして署名活動を続けてこられた地元の皆さまの喜ぶもひとしおであろうと思えます。2019年であったかと思いますが、「朝ドラに牧野富太郎を」の会長（佐川町長）や副会長（越知町長）のお二人から、NHK放送センターに要望に行き

ますとのお話を承っていましたので、うまく事が運ばれましたことに驚きと楽しみが交互に押し寄せられています。私は高知市五台山の麓に住んでもいますので、ほんとうにおめでたいことと、自分の事のように嬉しく思いワクワクもしています。前職時代には海外において、現地の旅行会社やメディアの方々に対して高知県観光を売り込む、いわゆるインバウンドの誘致活動も経験しました。その時のセールスポイントの一つが牧野植物園。『日本にはおよそ6000種の植物が生育するといわれ、日本の「植物分類学の父」牧野博士を顕彰する同施設は、8ヘクタールの大園地を有し、3000種以上の草花が生き生きと四季を彩る総合植物園です。特に温室はジャ

ングルの中にいるかのよう…」などとアピールをしていました。私にとりましてNHKドラマと聞いて思い起こすのはやはり「龍馬伝」です。飛騰118号にも寄稿しましたが、私は大河ドラマ「龍馬伝」とリンクして開催されました観光博覧会「土佐・龍馬であい博」で、現場の総括責任者の役割を担わせていただきました。日本銀行高知支店の発表では、このドラマによる高知県への経済波及効果が、最終的に500億円超となったと発表されたことでした。「らんまん」の「物語のスタートは高知」とのこと。コロナ禍での観光のキーマードの一つは自然・文化体験。多くの方々が、その土地土地ならではの「自然と親しむ」、「文化と親しむ」といった場を通じて、その奥深さを体感することに関心と期待を持たれていると思います。ですので、来春から長期間連続して放送される「らんまん」の放送効果を追い風に、本県の自然と体験型の多様な観光資源を生かしながら、観光を目的とする人の流れを創り出し、観光客の皆さんとともに高知県観光をスパークさせていければなど、このような思いを巡らしているところです。



「草を纏い木の根を枕 花と恋して五十年」
牧野富太郎書 弘松家所蔵・当館寄託

■「記念館開館30周年10大ニュース“こんなことがありました！”から新年度へ」

海に見える・ぎやうらいでは、記念館開館30周年の締めくくりとして「高知県立坂本龍馬記念館30周年 10大ニュース “こんなことがありました！”展」を開催しました。本企画では、多くの方々のご尽力、ご協力を得て30年を迎え、その間にあった多くの出来事を、新聞記事や館の記念誌、職員の思い出や記憶などの中から意見を集約し、以下のような結果となりました。

- 1 浄財により龍馬記念館建設・開館
- 2 新館完成・リニューアルオープン
- 3 龍馬伝効果
- 4 相次ぐ貴重な資料の寄贈・寄託
- 5 坂本龍馬を師と仰ぐ世界的VIPの来館
- 6 シェイクハンド龍馬像 - 新しい「龍馬像」の完成
- 7 新型コロナウイルスの感染拡大により初めての休館
- 8 ミュージアムショップの充実
- 9 坂本龍馬記念館の応援団の皆様
- 10 盗難と破損等—多くの災難を乗り越えて



FM高知のラジオ番組でもこの展覧会について紹介させていただいたところ、それぞれの項目の詳細をもっと知りたいというお声も頂戴しましたので、少し紹介いたします。

「龍馬伝効果」は平成22年、NHK大河ドラマ「龍馬伝」をご覧になった多くの方々にご来館いただき、ゴールデンウィークには、入口から館に向かう坂道まで来館待ちの方が大勢並び、入場者制限を行いながらご入館いただきました。そして1日の入館者数が6,686人、当該年度の入館者合計数は44万2千人余りという、過去最高を記録しました。

また、平成23年には、開館20周年を記念して、本館前に新しい龍馬像「シェイクハンド龍馬像」が完成しました。3人の高知県の作家、大野良一さん、西本忠男さん、吉岡郷継さんにより、“誰もが共通して龍馬の温かみを感じる手”を追求して創作され、沢山の方が龍馬と握手をしてくださいました。そして翌年には、桂浜龍馬像とシェイクハンド龍馬像をつなぐイベント「レッツゴー！ハンドインハンド」を開催し、当時の尾崎正直高知県知事をはじめ大友啓史映画監督、郷土坂本家第9代坂本登さんなど900人が「握手の鎖で心をつなごう」と参加され、2つの銅像の手ががっちり繋がりました。ただ、現在は新型コロナウイルスのために、残念ながら握手が出来ない状態です。

この30年の間にも刻々と変化してきた社会情勢の中で、海に見える・ぎやうらいにおける展示内容も、“坂本龍馬を伝えてゆく意味”を大切に、さらなる試みを目指していきたいと考えています。

中村 昌代



入館状況

2022年3月20日現在

(1991年11月15日開館以来 30年126日)

◆入館者数 4,419,002人

■リニューアルオープン(2018年4月21日)以来 482,242人

お知らせ

今号の「高知県立坂本龍馬記念館・現代龍馬学会」会報につきましては、会報の紙面割りなどを検討中であることにともない、発行をお休みします。ご了承ください。

編集後記

右も左もよく分からない状態で本誌の編集担当という大役を仰せつかったのが平成30年10月。その後副担当となり、編集に携わって計3年ほどが経過しました。令和3年度末の退職に伴い、今号が最後の編集となりました。ニーズに応えた誌面づくりがどこまでできたのか甚だ心許ないですが、精一杯無知無恵を絞り出したつもりです。今後は一読者として、年4回の発行を楽しみにしたいと思います。今後ともご愛読の程よろしく願いいたします。(高山 嘉明)

館だより“飛騰”第121号(年4回発行)表紙題字：書家 沢田 明子氏

発行日 2022(令和4)年4月1日

発行 公益財団法人高知県文化財団

高知県立坂本龍馬記念館

〒781-0262 高知市浦戸城山830

TEL (088) 841-0001 FAX (088) 841-0015

http://www.ryoma-kinenkan.jp

「飛騰」に対するご意見ご感想などお寄せください

開館時間 9:00~17:00 年中無休

入館料 一般500円(企画展開催時700円)

高校生以下無料

高知県・高知市長寿手帳所持者、療育手帳・身体障害者手帳・精神障害者保健福祉手帳・戦傷病者手帳・被爆者健康手帳所持者とその介護者(1名)は無料



「飛騰」は郵送料のみのご負担でお届けいたします。購読希望の方は120円切手をご希望回数(4回分まで)お送りください。

〒781-0262 高知市浦戸城山830 高知県立坂本龍馬記念館「飛騰」購読係 まで